

『林業青年との交流について』

沼津市漁業協同組合青壮年部連絡協議会
会 員 大 川 隆 夫

1. 地域と漁業の概況

沼津市は、四季を通じて気候は温暖であり、北に霊峰富士を仰ぎ、ふところ深くに駿河湾を抱く恵まれた自然環境を有している。人口は約21万人、静岡県東部の中心都市として重要な役割を果たしている。

本市の水産業は、魚種の豊富な駿河湾と変化に富んだ長い海岸線を有する自然的優位性に加え、首都 100km圏内に位置する立地条件を活かして発達してきた。

漁業の主力は沿岸漁業だが、その形態は多種多様で、一本釣を主体とする沼津我入道漁協、中小型まき網・船曳網が主体の静浦漁協、中小型まき網・海面養殖業を主体とする内浦漁協の3つの漁業協同組合が、正組合員 647名、準組合員 1,279名を擁している。(図1)

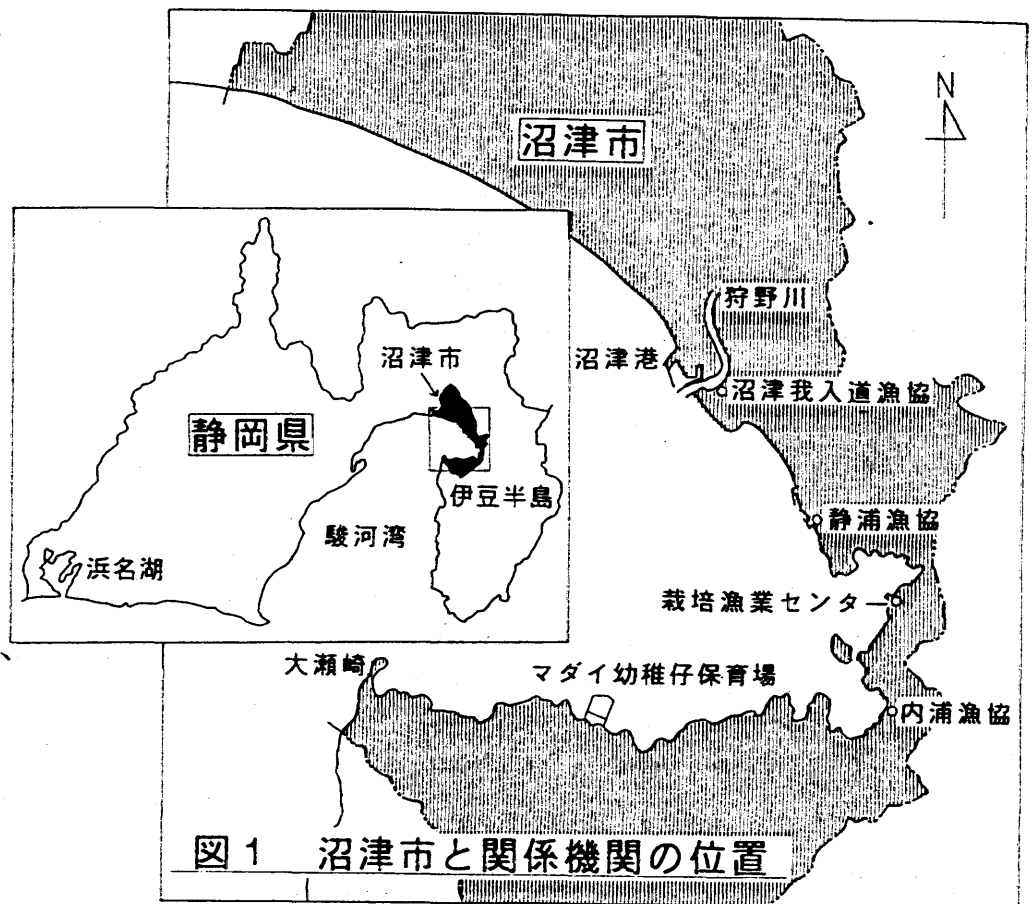


図1 沼津市と関係機関の位置

2. 研究グループの組織と運営

沼津市漁業協同組合青壮年部連絡協議会は、昭和53年、当地に静岡県栽培漁業センターが設立され、内浦湾にマダイの種苗放流が開始されることに伴い、それまで個別に活動していた沼津我入道・静浦・内浦各漁協の青壮年部が、協同してこの放流事業に協力し、漁業の振興を図ることを目的として、翌54年に協議会として発足したものである。

以来18年に渡り、マダイ栽培漁業の啓蒙と実践、技術改善及び経営に関する調査研究、講習会等の開催、水産資源の保護育成などに積極的に取り組んできた。平成7年からはヒラメ増殖事業への取り組みを開始し、マダイ放流と並ぶ活動の柱となっている。

3. 実践活動課題選定の動機

近年、『森は海の恋人』といったことが盛んに言われ、森林が水産資源を守り育てるとともに、海の環境保全に重要な役割を果たしていることへの認識が高まっている。

こうした中で、一昨年(平成9年)の9月、JA静岡青壮年連盟が開催した第一次産業青年交流の船「ミックスベジタブル・クルージング」に、静岡県漁協青壮年部連合会の会長でもある当協議会の塩谷会長と、静岡県青年林業研究協議会連合会(静岡県林研)の小泉会長が参加した。このイベントでの出会いがきっかけとなって、漁業と林業に関わる青壮年による、「林業・漁業青年交流大会」が行われることになったのである。

この交流大会は、漁業・林業がともに後継者不足などの悩みを抱えていたにも関わらず、今まで交流がなかったことから、お互いが理解し合うことができたなら、という期待を含めて企画された。実際にお互いの作業を体験しながらの交流会は、静岡県内でも初めての試みであるという。会場として沼津市が選ばれ、我々はその準備・開催に全面的に協力することとなった。

4. 実践活動状況及び効果

開催に向けての話合いは、平成9年の年明け早々から始まった。何回かの話合いの結果、4月下旬には、大会の日時を10月19日とすること、漁業側の作業として魚の放流、林業側の作業としてクロマツの植栽をメインに行うこととなり、具体的な準備へと移っていった。

大会に先立って、8月には静岡県林研の役員が、沼津市で行われたマダイ放流に参加した。林業青年たちもマダイの稚魚に標識を打ったり、放流をしたりといった作業を体験したが、慣れない船の上での作業には相当戸惑っていた。

大会当日、会場の静浦漁協漁民研修施設には、県漁青連、沼津市青壮年部、県内各地区の林業研究会員をはじめ、JA静岡青壮年連盟の役員など予想を上回る180名以上の参加者が集合した。

開会式は、大漁旗で飾りつけされたホールで行われ、小泉・塩谷両会長の挨拶で始まった。続く来賓祝辞では、沼津市長をはじめ、急遽駆けつけて下さった全国漁青連の会長など、多くの来賓から祝辞をいただいた。

その後、大会決議が双方の代表によって力強く読み上げられ、全員の拍手で承認された。(図2)

大会決議

近年、私たち市民生活の周辺では、都市社会の進展による二酸化炭素の増加、あるいは化学物質(農薬)などによる地下水(川・海水)の汚染、計画性のない森林伐採等に原因する地球環境の悪化が問題になっている。

このことは、日頃、自然とのかかわりが深い一次産業に携わる者にとって、無視できないことであり、そのまま放置すれば、自分たちの^{生活}生業や生活に大きな影響を及ぼすことが懸念される。

ここに、自然を相手に汗を流し、恩恵を受けている者が今こそ連帯し、一般社会の人々に率先して、環境問題について取り組むべきものと確信する。

今、私たちに、周辺のあらゆる問題に対する、迅速な行動力が求められており、積極的な行動こそ一次産業の存在感を高め、一般社会に対する影響力を発揮する数少ないチャンスである。

できる、できないは私たち自身の意志(やる気)の問題である。

この大会を機に農林漁業一体となって、大きな力で世界に意見発信ができるよう前進することを決議する。

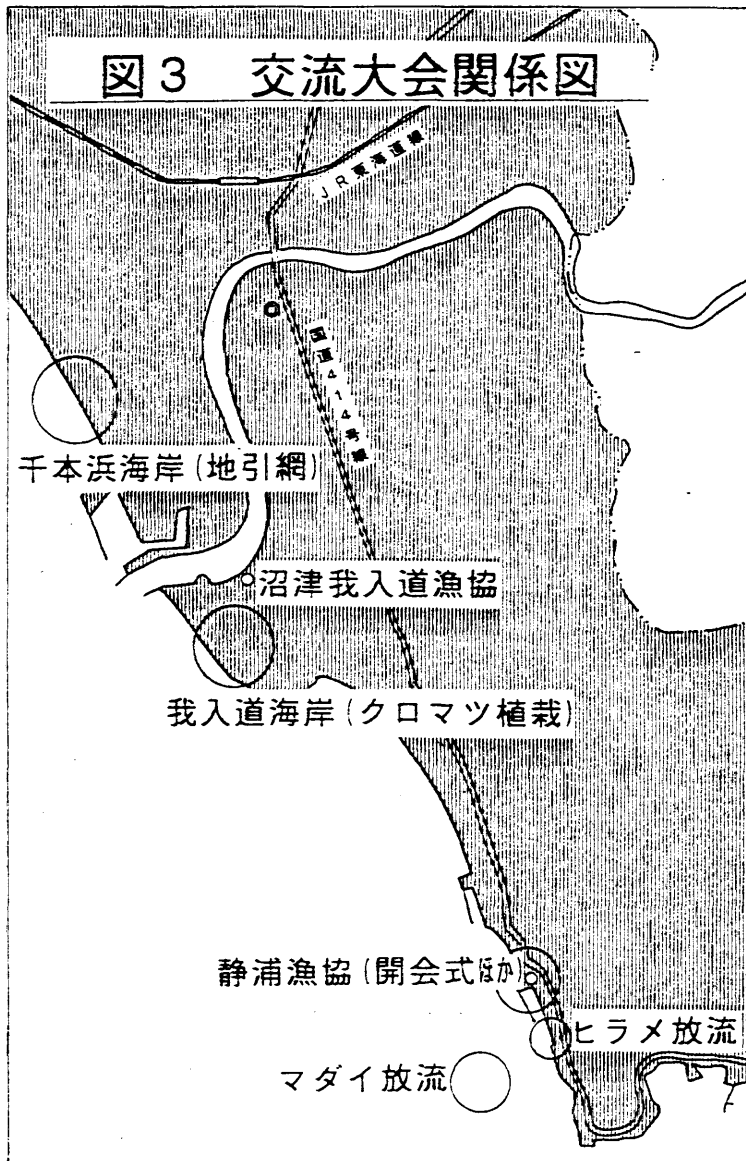
平成9年10月19日

静岡県林業・漁業青年交流大会

図2 大会決議(全文)

次に、林業・漁業の活動報告が行われた。林業側からは一本の木が植えられてから出荷されるまでの過程等について、漁業側からはマダイ・ヒラメの放流などについて報告され、参加者は、普段知る機会のない異業種の仕事について、熱心に聞き入っていた。

昼食には、沼津市青壮年部が内浦漁協婦人部と協力し、大漁鍋を用意した。カニやタイの沢山入った大漁鍋は大好評で、大鍋2杯分がすぐ空になった。また、青壮年部員の提供・指導により、林業青年が出刃包丁を持ってアジのタタキづくりに挑戦したり、とれたてのシラスがふるまわれたりと、賑やかな食事となった。



続いて、マダイ・ヒラメの放流体験を行った。栽培漁業センターの方から説明を受けた後、ヒラメは3~4尾ずつバケツに入れて静浦漁協近くの岸壁まで、マダイは2隻の漁船の水槽に積み込んで静浦沖まで運び、放流した。

ヒラメは、静浦漁協の活魚棟で青壮年部が中間育成して、放流した稚魚の一部を残しておき、飼育していた約600尾で、15~20cmに成長したものである。一部のヒラメには、追跡調査等のために標識タグが打っており、林業青年からはこの標識について質問が多かった。

マダイは栽培漁業センターで飼育してもらっていたもので、15~25cmに成長した約300尾を放流した。2隻の漁船には30人ほどが乗り込み、漁業青年がバケツに移したマダイを林業青年が海に放したが、魚の元気がよいのに驚いたようで、おっかなびっくり放流するようすが見られた。

放流終了後、我入道海岸に移動し、自治会長から歓迎の挨拶をいただいた後、クロマツの植栽を行った。用意された苗木は、抵抗性クロマツが100本、普通のクロマツが200本の計300本である。この抵抗性クロマツは、静岡県西部農林事務所育種場で生産された、松くい虫等の被害に強い品種で、今回特別に提供していただいた。

植栽場所は、地元自治会の協力により、午前中に下草刈りがされており、最も海岸に近い場所に抵抗性クロマツを、その他の場所にクロマツを植樹した。ここでは、先程とは違って、鍬などを持ち慣れない漁業者を林業青年がサポートし、協力して作業を行う姿が数多く見られた。

全員が一生懸命作業した結果、予定より早く植樹を終え、記念撮影をして交流大会を終了した。この日植えられた苗木は、毎日世話をしてくれる地元自治会の方々のおかげで、元気に育っている。

その夜は、漁業・林業・JAの3団体で、交歓の夕べが催された。林業青年たちは伊豆長岡に宿泊し、翌日、沼津市千本浜海岸で地引き網の体験をした。あいにくかかった魚は少なかったが、楽しい経験となった。

5. 波及効果と今後の課題

「林業・漁業青年交流大会」は、このようにして開催された。参加者の感想は、両業種とも、普段味わえない貴重な体験ができた、というものが大多数であったが、お互いの業種の本質に迫る体験ができなかった、作業の体験だけでなく意見交換の場がほしかった、双方の会員個々の交流ができなかった、という声もあった。これは大会が参加者も多く、大規模な催しとなったことに起因するものであると思われる。

今回の大会をもって、漁業・林業青年がお互いに理解し合い、共通の課題の解決に取り組んでいくという当初の理念を全面的に達成できたわけではない。また、前述の感想にあるような課題や、開催の方法などにいくつかの問題点も残った。しかし、第一次産業に関わる青壮年の交流が具体的な形となり、第一歩を踏み出せたことは、何にも代えがたい大きな成果であった。

来年度以降には、JA青壮年連盟を加えた農・林・漁業3団体での交流が計画されている。これからの第一次産業を担う、われわれ若い力の絆を深めることによって、それぞれの産業の活性化につなげていくことができるような有意義な交流を、今後もさまざまな形で続けていきたい。